



Title	社会構成主義の視座に基づく日本語教室内での自己開示の分析—中級日本語クラスにおける教師と学生の相互行為に注目して—
Author(s)	李, 眞善
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103113">https://hdl.handle.net/11094/103113</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 李 眞 善 ）	
論文題名	社会構成主義の視座に基づく日本語教室内での自己開示の分析 ——中級日本語クラスにおける教師と学生の相互行為に注目して——
論文内容の要旨	
<p>本研究は、社会構成主義の視座を基に、さまざまな文化と価値観を背景にしている留学生たちが、日本語教室内でどのようなことばで自己開示を行い、教師と他学生との相互行為の中でどのような学びを得るのかを明らかにすることを目的とした。</p> <p>序論では、研究の背景として「社会構成主義」と「自己開示」の関係性について論じた。「社会構成主義」、「社会構築主義」（Gergen, 1999; 東村訳, 2004）の立場では、現実世界はことばによって社会的に構成されており、ことばを理解することは日常生活の現実を理解することになる（Berger &amp; Luckman, 1967; 山口訳, 2003）とされている。つまり、ことばは、現実および自己と密接に関係しており、現実と自己を構成していくためにはことばが不可欠なのである。このような考えのもと、言語習得や言語学習に関わる分野において「自己を語ること」が重視されるようになり、「自己表現」や「自己開示」という用語でそういった活動が教室の中で行われるようになった。本研究においては、経験や感情といったよりオリジナリティがあり、かつ深度のある自己の語りに注目し、社会的・心理的な視座から学生の語りを見ていくために「自己開示」という用語を使用している。</p> <p>第2章では、本研究の理論的枠組みである「社会構成主義」と、主要概念の「自己開示」について先行研究をひきながら検討した。「社会構成主義」については、「現実」と「現実の再構築」といった視点から概観し、社会構成主義の視座からJSL（Japanese as a Second Language）環境における留学生の現実について述べ、日本語の教室を「対話の場」として捉えた。その後、社会構成主義的な考え方を持つ学者として知られているヴィゴツキーの理論を基に、ことばの「意味」の獲得および再・構築について論じた。「自己開示」については、いくつかの定義と意義を取り上げ、社会構成主義の視座から「自己」および「自己開示」の位置づけを示した。その後、自己開示が従来の第二言語習得および日本語教育においてどのように研究されてきたのかを概観し、「能力」から「学び」への転換の重要性を訴えた。以上を踏まえ、本研究では次の3つの研究課題が提起された。1）日本語教室内で学生は、教師と他学生との相互行為の中で自己開示をしながらどのように現実を再・構築していくのか。2）日本語教室内で学生は、他者（TEDxの登壇者を含む）からどのようにことばの「意味」を獲得するのか。また、教師と他学生との相互行為の中で自己開示をしながらどのようにことばの「意味」を再・構築していくのか。3）教師および各学生にとって「自己開示」とはどのようなものなのか。また、自己開示が行われる日本語教室とはどのような場所なのか。</p> <p>第3章では、第2章で設定した研究課題を明らかにするために本研究で収集したデータと研究方法について説明した。本研究ではエスノグラフィーの手法をとり、2022年10月5日から2023年2月1日まで開講したある国立大学の中級日本語教室において参与観察を行った。なお、対象の授業ではTEDxを主教材としていた。調査協力者は留学生10名（出身国＝フランス、ドイツ、スウェーデン、ルーマニア、中国、台湾）及び教師1名であり、学期中には学生を対象にグループインタビュー調査を、学期終了後には各学生と教師を対象にフォローアップ・インタビューを実施した。それに加え、学生が提出した課題や学生同士のSNS上のチャットを閲覧し、分析を行った。データの分析においては、談話分析を用いた。また、談話の中での学生の自己開示をナラティブとして捉え、日本語教室における学生の自己開示が、教師との関係の中でどのように成り立っていくのかを明らかにするために「相互行為としてのナラティブ（Narrative as interaction）」を採用した。</p> <p>研究課題1に基づき、第4章では、日本語教室内で学生の自己開示が、教師や他学生の「聞き手の理解の証拠」（Clark &amp; Schaefer, 1989）に支えられたことで、現実に対する「評価」（Labov &amp; Waletzky, 1967）がどのように変化していくのかを分析した。その結果、例として、ある学生は当初、いじめられた理由を「自己」の中から探していたが、教師との相互行為の中で自己のことをポジティブに捉えられるようになった。また、現在の自分を関係性の中（新しい友達）で「変化した自己」として捉え直すことで、いじめられた経験という現実を肯定的な方向に再・構築してい</p>	

く様子が窺えた。

研究課題2に基づき、第5章では、日本語教室で教師と学生との相互行為を観察することで、学生がTEDxの登壇者のことばの「意味」を獲得し、自己開示の中でそのことばの「意味」を再・構築して語りを構築していく過程を明らかにした。ここでは学生が登壇者の内面世界が窺える自己開示（TEDx）からことばの意味を理解し、教室内での相互行為を経て、独自の「意味」でそのことばを自分の語りに埋め込んでいることが見られた。このように他者のことばの「意味」を獲得し、また独自の「意味」を構築することは、他者の意味世界を理解し、自分の意味世界をつくることにもつながる。そのため、今後、学習者自身の世界とつながる生きたことばとしての「意味」の獲得、引いては「意味」の構築も重視していく必要があると指摘した。

研究課題3に基づき、第6章では、教師および学生にとって「自己開示」とは何か、また自己開示が行われる日本語教室とはどのような場所なのかを分析した。教師の自己開示については、教育的意図や学生支援との関連が明らかになった。教師は、単なる言語習得に留めず、広範な視点からテーマを考察させることを目的とし、自己開示を教育的手段として活用していた。また、学生がネガティブな自己開示を行った際には、教師が関連する自身の経験を共有することで、学生が否定的な現実をポジティブに再・構築するように支援する姿勢が確認された。このような教師の自己開示は、学生たちにとって日本語のリスニングの練習になるとともに、新しい表現や日常会話での自然な話し方の学習・習得にもつながるなど、日本語学習の面でも有効であることが分かった。学生の自己開示に対しては、守秘義務を守るなど、学生に安心して自己開示を行える環境を提供しようとしていることが分かった。

学生の自己開示においては、他者との関係性や教室環境がそのプロセスに与える影響が確認された。自己開示を促進する要因として、「他者と共有したい気持ち」や「日本語をアウトプットしたい気持ち」が挙げられた。これらの要因は、教室が安心して自己開示を行えるような雰囲気の下で生まれることが示唆された。他者の自己開示を聞くことの利点としては、「多様な視点の獲得」「共感の形成」「関係性の深化」などが挙げられた。また、日本語学習においても、他学生が日本語で話すのを見て自分も日本語で話す勇気を持つようになったり、他の学生たちと日本語学習へのモチベーションを共有することができたりしていることが分かった。ここでは、教室内での自己開示が、学生間の親密度を高めるだけでなく、学習活動や課外活動を自律的に促進する重要な要素であることが明らかになった。

第7章では、研究課題3に対する研究の結果をまとめるとともに、総合的な考察を「深い自己開示」「教室に向けられた自己開示の返報性」「意味交渉」「教室内における自己開示の『意味』」の4つの観点から行った。特に、教室内での自己開示は自然に行われたのではなく、教師が持つ「自己開示」の「意味」、各学生が持つ「自己開示」の「意味」を根底に生まれたものであると指摘した。つまり、「自己開示」ということばの「意味」はすでに存在していたわけではなく、互いから獲得されたり、そこから再・構築されたりしながら自己開示という行為が行われたのである。

第8章では、本研究の意義として、社会構成主義の視座から日本語教室を捉えることで、1)「自己開示」が現実を再・構築し、「意味」の獲得と再・構築を促す、2)「自己開示」それ自体も社会的に構築される、3) 1)と2)が相互作用して「日本語教室」が社会的に構築されるという結論に至ることができた。ここでは、教師と学生の「自己開示」そのものが授業のマテリアルとして有効であることが示唆され、本研究の結果を基に、自己開示が行われる日本語教室内で教師と学生が注意すべき点を作成した。本研究の限界としては「自己開示」の度合い、範囲、そして、受け止め方など、人それぞれにとっての「意味」が異なることが垣間見られたことを述べ、本研究での結果と考察を基に「自己開示」を再定義する必要があることを今後の課題として設定した。

#### 【参考文献】

- Berger, P. L. & T. Luckman (1967). *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor. (山口節郎訳, 2003, 『現実の社会的構成—知識社会学論考』新曜社.)
- Clark, H. H. & Schaefer, E. F. (1989). Contributing to discourse. *Cognitive science*, 13, 259-294.
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage Publications. (東村知子訳, 2004, 『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.)
- Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis : oral version of personal experience. In J. Helm (Ed.), *Essays on the verbal and visual arts*. Seattle : University of Washington Press. 12-44.
- ヴィゴツキー著・柴田義松訳 (2001) 『思考と言語 (新訳版)』新読書社.

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 李 眞 善 )		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授
	副 査	准教授
	副 査	教 授
		義永美央子 榎本 剛士 村岡 貴子

## 論文審査の結果の要旨

「社会構成主義の視座に基づく日本語教室内での自己開示の分析—中級日本語クラスにおける教師と学生の相互行為に注目して—」と題する本論文は、エスノグラフィーの手法を用い、さまざまな文化と価値観を有する留学生を対象にした日本語教室の中で「自己開示」がどのように行われるのかを精察している。自己開示を含む語りを通じた「ことばの『意味』の再・構築」と「現実の再・構築」の過程を明らかにし、自己開示が行われる日本語教室の可能性を検討することが本論文の目的である。

本論文は全8章で構成されている。社会構成主義の立場から自己開示を分析する意義と全体的な構成を簡潔に示した第1章に続き、第2章では社会構成主義と自己開示に関する解説および先行研究の検討が行われた後、本研究の研究課題が3つ提示されている。筆者によると、本論文は、現実を「一瞬一瞬の相互行為の連続によって構成される間主観的なものであり、客観的な現実が存在しない」と捉える社会構成主義の立場をとる。その上で、日本語教室を対話の場と捉え、教室において自己を語る相互行為を通じて教室の参加者一人ひとりが自己を再認識するとともに、現実や他者との関係を再・構築していく過程に注目する。さらに、その過程を通じてことばの意味が獲得されたり再・構築されたりすることを、ヴィゴツキーの「語義 (meaning)」と「意味 (sense)」の概念を取り入れて論じている。

第3章はデータと研究方法の紹介である。本論文の分析対象は大学における中級日本語クラスであるが、このクラスでは日本語で行われたTED talksのプレゼンテーションを教材とし、プレゼンテーションの語彙・表現や内容を確認した後、プレゼンテーションで語られた内容について学習者がグループディスカッションを行う。グループディスカッションで語られた内容は、教師のファシリテーションのもと、教室全体で共有される。本論文は教室での参与観察、学習者に対するグループインタビューとフォローアップインタビュー、教師へのインタビュー、学習者が授業の課題として提出したエッセイ (TED talksやディスカッションの内容をふまえ、学習者が自らの経験や考えを書いたもの)、学習者同士のSNS上のチャットといった多様で豊富なデータを収集し、分析を行っている。

第4章から第6章は、本論文の3つの研究課題それぞれについての結果を示している。教室における自己開示を通じた現実の再・構築過程を分析した第4章では、いじめられた経験に触れたTED talksや日本の宗教観を説明したTED talksについて話し合う中で、学習者が自らのいじめられた経験や、国際結婚をした自分の両親が経験した宗教の違いによる困難を開示した例が示されている。これらの例では当初自分の経験を否定的に捉えていた学習者が、教師が示す「聞き手の理解の証拠」に依拠しながら語りを展開する中で、現実を肯定的な方向に再・構築していく過程が丁寧に描き出されている。続く第5章では、ことばの「意味」の獲得や再・構築に焦点が当てられる。TED talksの中で語られた「お金」や「背中を押す」といったことばが学習者にも共有され、学習者の語りやエッセイの中で、TED talksのスピーカーがそのことばに込めた「意味」を保ちながら使用されていることを明らかにした。さらに、ある学習者が発したことばが、数週間後に他の学習者によって元の「意味」を保ちながら使用される例に基づいて、他者のことばの「意味」が獲得され、それによって自らの意味世界が再・構築される過程の一端を示すことにも成功している。こうした結果は、多様で豊富なデータの複層的な分析に基づく成果といえる。続く第6章は、教師と学習者双方に対するインタビューの分析を通じて、教室で自己開示が行われる過程や、自己開示を促進する要因、阻害する要因について検討し、教室が安心して自己開示が行える場となることの重要性を主張している。

第4章から第6章で示された結果に基づき、第7章と第8章では総合的な考察を行うとともに、本研究の意義と日本語教室への示唆、今後の課題を述べている。今回分析の対象となった教室で行われた深い自己開示は、教室の構成員の間にみられる高い信頼感や親密感によって可能となる一方、深い自己開示を互いに交わす中で信頼感や親密感が高まるという相補的な関係にある。また、教室に参加した学習者は、自己開示を含む相互行為を通して、時には意味交渉を行いながら、ことばの「意味」を共有し獲得している。このような、生きたことばの獲得や使用を可能にする「対話の場」としての日本語教室は、教育実践的にも大きな意義をもつことが説得力をもって主張されている。

従来、心理学の研究の中で取り上げられることが多かった自己開示について、本論文は社会構成主義やヴィゴツキーの理論をふまえ、ことばの「意味」や対話者との関係性、さらには現実そのものを再・構築するための一つのリソースとして再概念化を試みている。本論文が取り組んだ学問的射程の拡大は、博士論文にふさわしい野心的な挑戦といえる。また、複数のデータに基づくトライアングレーションを行い、自己開示を含む相互行為を通じてことばの「意味」や現実が再・構築される過程を重層的に示すことにも一定程度成功している。特に、ことばの「意味」の共有や獲得が社会歴史的な文脈に埋め込まれた実践であることを、実際のデータに基づいて明確に示した点は高く評価できる。重要概念の定義や論の展開の一部に曖昧さや飛躍が見られるものの、複数の学問的潮流を統合させようとする意欲的な試みであるが故の課題であるとも捉えられる。今後、本論文に残された課題についてさらに考究を重ね、スケールの大きい研究として一層発展させることが期待される。

以上のことから、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。